

左遷も悪くない



霧島まるは

Maruha Kirishima

目次

第1章 わがまま娘と伊達男^{だておとこ} 7

第2章 敵と味方 145

番外編 エルメーテの日記 265

主な登場人物

ウリセスⅡアロ 29歳
↓↑
実直すぎてド田舎に左遷された主人公。
眼光鋭い優秀な軍人。

ヴァレリアアロ 22歳
↓↑
ウリセスに嫁いだ貞淑な女性。
愛称はレーア。
父の命を助けたウリセスの話を
繰り返し聞かされて育った。

イレネオⅡコンテ 20歳
↓↑
コンテ家三男。
体力も剣もそこそここの兵士。
兄弟で一番空気が読める。

エルメーテⅡバラッキ 23歳
↓↑
ウリセスの補佐官。
要領のいい好青年だが、
いささか腹黒い。

ルーベンⅡコンテ 25歳
↓↑
コンテ家次男。軍の小隊長。
剣の腕は見事だが、
それ以外は多くの難あり。

ジャンナアロ 16歳
↓↑
ウリセスの妹。
甘ったれのわがまま娘。

トビアⅡコンテ 26歳
↓↑

コンテ家長男。
役人だが、
予備役でもある。

セヴェーロⅡコンテ 19歳
↓↑
コンテ家四男。
ウリセスに憧れて軍人となったが、
体力が無い。



第1章

わがまま娘と伊達男

1 冬を待つ女

「レーア義姉さん、冬が来るわ！」

この家の主であるウリセスⅡアロを見送った後、彼の妹にして居候であるジャンナが、レーアとヴァレリアⅡアロに、ビシツと冬季の到来を告げる。

ウリセスは、この地域の軍の総司令官という肩書きだが、その実情は上層部に睨まれて左遷された、というものだった。

そんな左遷された男は、二ヶ月と少し前の秋の日にこのレミニの町に住むレーアと互いの顔も知らぬまま結婚した。バタバタとめまぐるしく過ぎた秋の日々は、まだ色鮮やかにレーアの記憶に残っていた。

「そうね、明後日から冬ね。冬朔の日は、何かおいしいものを作りましょうね」

気合の入った義妹の様子に少し気圧されながらも、レーアは暦の上で季節が変わることを確認して頷いた。

アロ家の玄関から入った突き当たりには柱時計があり、その横の壁に神殿が作成した一年の暦が

かけてある。日付の他に、祭事などが書き記されている一枚ものの紙だ。年の初めの頃に、神殿に寄進した時にもらえるものだった。

各季節の入りである上月の一日目は朔といい、ここミルグラーフ王国では新しい季節を祝う祭日とされている。この国の首都では、東西南北にある大きな神殿が、それぞれ春・秋・夏・冬の季節を祝う神殿祭を分担して行っていた。だが、南西の辺境であるこのレミニの町には、神殿がひとつしかない。そのため、規模は小さいものの、そこがすべての朔の日の祭りを取り仕切っている。

「私は、いつも南の神殿に行ったのよ」

都生まれのジャンナが、暦を眺めながら昔を懐かしむような声を出す。

朔の日、それぞれの季節に生まれた子供たちは十歳になるまで、神殿から祝いの菓子をもらうことが出来る。これが、子供たちにとっては何よりの楽しみだった。ジャンナは夏季の生まれだったので、夏朔の日に南の神殿に通っていた、というわけだ。

ああそうそうと、同じく都生まれのレーアも思い出した。都に住む子供たちは、神殿ごとに派閥を作って、北の神殿派だの、東の神殿隊だの、ごっこ遊びの組み分けなんかによく使っていた。

「私は東の神殿だったわ」

東の神殿にかけられるタペストリーの色は、緑。春生まれのレーアもまた、春朔が楽しみでしやうがなかった。

この国の新年は、春朔である。そのため、午前中は神殿で春朔の祭事が、午後には盛大な新年祭りが、国の行事として執り行われる。春生まれの子にとっては、朝から夕方まで祭りで浮かれる日だった。

末弟のセヴェーロも、レーアと同じ春季の生まれ。昔は仲良く手をつないで、母親に連れられて東の神殿へ通っていたものだ。彼女は懐かしい記憶を呼び戻していた。

母と長男トビアは秋季生まれで西の神殿で、タペストリーは黄色。父と次男ルーベン、三男イレネオが夏季の生まれで南の神殿。タペストリーは赤。春夏秋に生まれの季節が固まっていたため、コンテ家にとっては冬朔が一番地味な祭日だ。そのため、レーアは北の神殿にはほとんど縁がなかった。白いタペストリーのかかるそこは、少し遠いところであったのだ。

その、無縁な祭日は、

「ウリセス兄さんは、北の神殿組だったのよ」

ジャンナの一言で、一気にレーアの目の前に迫ってきたのだった。

レーアは、市場で大きなカブを買った。その帰り道、料理屋に働きに出て来た母と偶然に会い、少し話をした。冬朔のカブ料理について、女同士で語り合う。

カブは、冬朔を祝う野菜の中で、一番有名なものだ。とろとろに煮込むシチューにも、あっさり

煮るスープにも向いているそれは、冬朔の直前に飛ぶように売れる。次に売れるのが白菜。

ちなみに春はキャベツが多い。そら豆派も負けじと主張しているが、いまだ劣勢だった。夏はカボチャが一番強い。よその国から種が持ち込まれたトマトなる野菜が食い込みつつあるらしいが、まだまだ作っている地域が少ないため、レミニの町には無縁の話だった。秋はジャガイモ派とサツマイモ派との間で毎年熾烈な争いが続き、秋生まれの人間が複数集まると、イモ戦争が勃発することもある。

ともあれ、冬朔の日にはおいしいカブのシチューを作ろうと、レーアは張り切っていた。初めて来るウリセスの誕生季でもあり、結婚して初めて一緒に迎える新しい季節なのだから。

「冬朔は、お仕事ですか？」

その夜レーアは、寝室でウリセスの予定を聞いてみた。いつも離れて着替えをする時の、気軽な雑談にまぎれこませる。

結婚してこれまで、彼は仕事を休んだことがない。豊年祭や新年祭は、町をあげてのお祭りなので軍も忙しいだろうが、冬朔は違う。神殿が中心の、どちらかというと家庭的な祭日である。だから、休めるのではないかと思ったのだ。

「ああ、冬朔か……」

いま思い出したように、ウリセスが呟く。祭日とは言え、軍から誰もいなくなるわけではない。レーアの兄弟たちも、いつもより休める確率は高かったものの、仕事に行く時もあった。

ウリセスは、しばらく沈黙していた。レーアは気になって、寝巻きに頭を通しながら振り返る。彼は物思いにふけているのか、肌着のまま少し顎を上げて動きを止めていた。

自分の誕生季だ。きつと思いつくもあるだろう。レーアにとつては無縁の神殿に、小さなウリセスが通っている姿は、残念ながら彼女には想像出来ない。小さなウリセスというのは、彼女の想像力では到達出来ないところにあった。レーアは、ウリセスの大人の姿しか知らない。どんな子供時代を送り、何を考えていたか。それは思い出話でしか共有出来ない、古い過去の物語だ。

そんな彼が、肩越しにふつとレーアの方を振り向いた。不意に視線を向けられてどきつとした彼女は、寝巻きを整えているフリをした。彼の子供の頃を想像しようとしていたなんて、気づかれることはきつとないだろうが。

「……冬の生まれか？」

視線を一度合わせた後、ウリセスはその身体をもう少しレーアの方へと振り向かせてから聞いた。「え？ 私ですか？ いいえ、私は東の神殿ですよ」

都生まれにしか通用しない言葉で、彼女はふふふと笑って返した。数少ない、彼との共通点だ。きつとこれで、春生まれであることはすぐに分かってくれるだろうとレーアは思った。

「そうか……冬朔は仕事に出る」

しかし、ウリセスは彼女の笑顔に視線で応えてくれたものの、言葉はつれなかった。そして彼は、肌着に手をかけて着替えの続きに戻ってしまった。

「仕事、お忙しいんですか？」

少し残念に思つて、レーアは思わずそんな小さな抵抗を口に出していた。

秋の初めに結婚して、もはや冬になろうとしているのだから、三ヶ月近く休みなしという計算になる。そんな勤務は、レーアの兄弟もしたことがない。夜の勤務など変則的な部分もあるが、一ヶ月に四、五日ほどは休みがあった。

いくら連隊長という大変な肩書きだったとしても、さすがにウリセスは働きすぎではないだろうかと、彼女も心配だった。

「いや、いつも通りだ」

それは、解釈に困る返事だった。いままで一日も休んでいない状態で「いつも通り」と言われたら、常に忙しいという意味にも取れる。

「たまには、お休みになった方が……」

レーアは、言葉をにじり寄せた。これまで、彼女は夫の仕事に関して口出しをしてこなかった。どこまで言っているのか分からず、彼女は言葉を少しずつウリセスに近づけながら、その表情を窺

い見る。

そんなレーアの声は、さすがに夫に疑問を抱かせたのだろう。「冬朔に、何かあるのか？」と、問い返されてしまった。その日に何か予定があつて、ウリセスの休みを望んでいると勘違いしたようだ。

寒くなってきたというのに、ウリセスは下穿き一枚で寝台へと向かっている。いつものことなので、レーアもその光景には大分慣れてしまった。しかし、ぼーっと見ているわけにもいかず、着替えを済ませた彼女もまた、慌てて寝台の反対側へと歩きながら、ウリセスの誤解を解くべく言葉を探した。

「あの……ウリセスの誕生季が、冬だとジャンナから聞いて……」

寝台に手をかけた状態で、彼は動きを止めてレーアを見た。彼女もまた寝台の前で足を止めた。

「祝ってもらう年でもないぞ」

ウリセスに真顔でそう返されて、レーアの方が恥ずかしくなってしまった。仕事と私事を、ごっちゃにしたと思われたのだろう。

「いえその、お祝いとかそういうのじゃなくて、あの……あ、お祝いしたくないって意味じゃないですよ……そうじゃなくて、ああもう……ずっと働き詰めでいらつしやるから、たまにはゆっくりお休みになった方がいいんじゃないかと……あつ、風邪をひくといけませんから中へ」

恥ずかしさに顔を赤らめながら、彼女は必死に言い訳を並べようとした。じっと見られるのも辛いので、掛布の中へ彼を誘う。

「あ、あと、ジャンナが冬物の服を欲しいと……あまりたくさん持ってきていなかったようです」

一緒に掛布の中にもぐりながらも、レーアは言葉を止められなかった。変に思われたのではないかと感じると、なおさら慌てて取り繕おうと必死になつてしまう。底の抜けた樽のようだと、レーアは自分を恥ずかしく思った。

「いくらかは貸せるのですが、ジャンナは背が高いので、私の服では可哀相で」

ウリセスの妹であるジャンナは、実家を継いだ長兄ランベルトとケンカをして家を飛び出してきた。都から駅馬車で七日離れたこの家に来た時には、大きな旅行鞆ひとつ抱えただけの状態だった。持つて来た服は多くはなく、ジャンナはそれをよくレーアにぼやいていた。

冬朔の休みの話が、いつの間にかジャンナの衣装の件にすり変わっているのにも気づかず、レーアは枕に頭を預けながら夫の方へと顔を向けた。

「朔の日は、店のほとんどが休みだ」

そんな彼女の多くの言葉は、ウリセスの冷静な言葉で轟沈ごうちんすることとなる。しかし、自分の愚かさ、ずぶずぶと冷たい海に沈みかけたレーアを、

「……分かった、近いうちに休みを取る」

隣からかけられた一言が、強い力で水面へと引き上げた。一瞬驚いた彼女だったが、目を大きく開いて隣に横たわるウリセスを見ると、いつも通りの、冗談とは無縁の表情だった。その表情のおかげで、逆に彼の言葉が真実なのだ、レーアは強く感じる事が出来た。

「それでいいか？」

「は、はい、ありがとうございます、ウリセス」

お世辞にも優しげとは言いがたい彼の目の中に、確かに優しさを見つけてレーアは嬉しくなった。そのままジャンナのように、抱きついて嬉しさを伝えられればどんなにいいだろうかと思っただけ、恥ずかしさが上回って、実践することは出来ない。

そんなレーアにウリセスも話のキリがいいと思っただのか、「消すぞ」と一言伝えて燭台しよくだいの灯りを消してしまう。

レーアは、せつかく水面に戻ったというのに——その夜、もう一度潮うしほれる羽目となった。

2 冬を思う男

「冬朔とその翌日、休み取れますよ」

「いや、冬朔はいい。その翌日を休みとしてもらおう」

ウリセスは、補佐官のエルメーテにバラッキと、冬季の仕事の打ち合わせついでに日程の調整をしていた。

「冬朔は通常より兵士の勤務数も少ないですし、連隊長閣下が訓練を指揮するほどの日ではありません。第一、僕は休みます」

連隊長室に机は二つ。奥にウリセス、扉側がエルメーテ。それ以外に、応接用のソファがある。補佐官との細かい打ち合わせは、たいていソファで行うことにしている。顔を突き合わせて話をする時は、この方が都合がいい。

神殿が作成している暦が、二人の間のテーブルの上に置かれている。エルメーテの愛用品であるそれには、多くのメモ書きが残されていた。

ウリセスの向かい側で、エルメーテが困ったように顔を歪めている。しかし、元の顔が柔和なせ

いで、大した迫力はない。ウリセスの普段の表情よりも、はるかに優しい顔と言っている。外からは、走らされている兵士たちの掛け声が硝子窓越しに聞こえてくる。走って身体を温めるにはいい季節だと、ウリセスは無意識にそう考えていた。

「好きに休め」

意識的に考えるのは、補佐官への返事。エルメーテとは、まだそう長い付き合いではないが、ウリセスが休まなくとも彼はきっちり休んでいる。「○日に、お休みいただいてもいいでしょうか？」というのが、彼の定番の確認方法だった。一般の兵士と違い、補佐官は上官の都合で細かく予定が変わるため、仕事が詰まっていけない時にその都度休みを申請するという形になっている。

「上官である連隊長閣下も、好きに休んでもらわないと困るんですよ。上官が出勤してるのに補佐官が休みって、聞こえが悪いんですから」

エルメーテは、これまでのウリセスの休みについて、言いたいことがあったのだろう。いい機会とばかりに畳み掛けてくる。逆にこれまでの彼の言葉には、まだ遠慮が含まれていたのだと、今更ながらにウリセスは気づいた。

「それに、連隊長閣下は冬の生まれですよ。奥様が、大きなカブを買ったそうですよ。閣下にお祝いに食べて頂くと、張り切っていたそうです」

更に畳み掛ける言葉は、急に方向性を変えている。一体どこから妻の買い物情報まで手に入れて

くるのかと、ウリセスは疑問の目でエルメーテを見ざるを得なかった。

「あ、コンテ夫人がうちの店で働いてるんです」

ウリセスの視線の意味を汲み取ったのか、彼はさつさと情報源を明らかにした。それに、ウリセスは簡単に納得した。なるほど、と。

レーアの母が料理屋で働いているのを彼は知っていたが、まさかエルメーテの家だとは思っておらず、世間は狭いものだと思いを吐いた。

カブ。その野菜は、ウリセスにある記憶を呼び起こさせた。士官学校に行くまで——つまり彼が子供の頃、実家での冬朔の晩餐はいつもカブだった。北の神殿のタペストリーと同じ、白い野菜である。

「お前の皿には、カブを多く入れたよ」と、母親は毎年カブだらけのシチューをウリセスに差し出した。カブをさほど好きというわけではないが、彼がそれについて何か言ったことはない。黙って食べるだけだ。「男は食事に文句を言うな」と、祖父に厳しく躰けられていたせいである。

だからウリセスはカブという言葉を聞くと、まず最初にカブだらけのシチューという一番強烈な記憶が引き出される。よくもまあ、ひとつの皿にあれほど盛ったものだ、と。

「閣下は、結婚式以来、全然休みを取ってらっしゃらないじゃないですか。いくら管理職で、休みを自由にしやすいからと言って、逆に全く取らないというのは馬……おかしいことです。たま

には、奥様や妹さんと出かけるといいんじゃないですか。家族と仲良く買い物に出る連隊長……町の人の印象も、もう少し変わるでしょうし」

母親の記憶を辿っていたウリセスは、強い力でエルメーテに引き戻され、それでもかと言葉を積み重ねられた。

ウリセスは、別にムキになって休みを取らないわけではない。戦場では、身体を休めるという意味での休みをたっぷり取れるほどの時間はほとんどなかった。逆に休戦後、都に戻ってから左遷が決まるまでは、褒賞休暇を与えられた。また閑職部署に放り込まれていたのも、休みが多過ぎて己の身を持って余すほどだった。その二つを体験した上で、自分は働いていた方が楽だという結論にたどり着いたのだ。

「書類の件は大丈夫です。十分間に合います。というわけで、異論がなければ連隊長閣下は、明日と明後日の二日間休みということ。せっかくですから、僕も連休をいただきます」

だがそんなウリセスも、休む段取りをここまでお膳立てされて、意固地になる理由もなかった。

「……分かった、ではそれで」

「分かっていただけで恐縮です。では、これからも定期的に休日をご組ませさせていただきます。希望の日があればおっしゃってください」

ウリセスの短い返事に対し、言質は取ったとばかりに気がつけばエルメーテが休みを水増ししよ

うとしていた。仕事以外に大して能のない自分のような男は、働いている方が人のためになるだろうとウリセスは思ったが、その理屈は彼には通用しないようだ。

「有能な補佐官だな」

だから、少しの皮肉を込めてそう伝えたのだが、エルメーテはその目を極限まで細めてにっこりと笑ってこう言った。

「お褒めにあずかり光栄です」

「明日と明後日が休みになった」

夕食の席でそう告げると、隣に座っているレーアは食事の手をぱつと止め、晴れやかな顔を彼に向けてきた。

「へえ、私に来てから休むの初めてじゃない？」

レーアの向かいのジャンナはと言えば、大袈裟に驚いてみせる。「休むのは結婚式以来初めてだ」と細かく訂正してやる義理は、ウリセスにはなかった。更にジャンナがうるさくなるだけだと分かっていたからだ。

「分かりました。明日は神殿に行かれます？ ゆっくりなさいます？」

レーアもその訂正はせずに——というよりは、もはや休みのことで頭がいっぱいなのか、嬉しそ

うな顔で隣のウリセスを見つめてくる。明日、すなわち冬朔の予定を確認するその声は、小さいながらも弾んでいた。

「神殿に行きたいのか？」

元々ウリセスは、この休みを自分のものとして使うつもりはなかった。だから、妻に希望を聞くことにしたのである。これまで彼は、まとまった時間を家のために使ったことはなかった。

「私に行かないわ。もうお菓子がもらえる年じゃないし、冬朔はもともと私には関係ないしね……お店だってやってないでしょう？」

しかし、のんびりとした気性のレーアが考えて答えを出すよりも、ジャンナの口の方が倍以上速かった。アロ家の人間はみな、いまひとつ信心深くない。祖父が、神に祈る性質ではないからだろう。兄のランベルトもウリセス自身も、願うより動く派だった。ジャンナもまたご多分に漏れず、神殿とは子供が菓子をもらうだけの場所ぐらいの感覚なのだろう。

「私は……」

ジャンナの早口に押されたのか。レーアはそこまですると言葉を出したものの、その後が続かない。言いかけたまま止まって、何か考えている。物凄く行きたいというほどではないという、微妙なところで揺れ動いているのかもしれない。

「行くか？」



ただ、行かないと決断したにしては考えが長かった。だから、ウリセスは肯定的に問い直す。否定的な問いかけだと、彼女が自分の希望を引つ込めてしまいそうに感じたのだ。

「じゃあ、午前中に少しだけ……いいですか？」

そんな彼の呼び水に引つ張られ、レーアがやっと答えを出した。

「ああ」

豊年祭の時、一緒に神殿に行く予定を台無しにしてしまったウリセスとしては、これくらいはお安い御用だった。こんなことで埋め合わせが出来るとは、思ってもいなかったが。

これで冬朔の予定が決定し、穏やかな夕食の時間が続くと思われた矢先。

「兄さんも、もうお菓子はもらえないんだからね」

ジャンナがニヤニヤしながら、兄をからかってくる。ウリセスがジロツと視線を向けると、慌ててあらぬ方を見た。

「冬服がいるんじゃないのか？」

ウリセスは軽い脅しを言葉に込めたが、「女性にそんな脅迫をしていいのかしら？ あ、二日も休みだったわね。二日目にしましょ」と、まったく気にしていない澄ました顔で、ジャンナはさつさと己の予定をねじ込んだ。レーアに言われていたので元々その予定だったが、当たり前のように持っていかれると、ウリセスとしてもやはり少しばかり面白くない。

兄妹の間でバチつと視線の火花が散る。そんな彼らを見て、レーアがふふふと微笑んでいた。

ウリセスは風呂呂に入っさつぱりした身体で寝台に入った。祭日の前の日だからと、レーアが風呂の支度をしてくれていたのだ。

「明日から冬になりますね」

人の都合で決めた季節の線でも見えるかのように、レーアがそんなことを言葉にしながら、寝台の隣にもぐりこんでくる。寒くなるというのに、何故か嬉しそうだ。

「冬が好きなのか？」

ウリセスの素朴な疑問に、レーアが一瞬きよんとした顔をする。まだ燭台を消していなかったからこそ、見えた表情だった。

「ええと……そうですね、今年から好きになりました」

その顔が、ゆつくりと笑顔に崩れていく。

何か、冬が好きになるようなことでもあったのだろうか？ ウリセスは考えるが、分かるはずもなかった。ただ、自分が生まれた季節を好きだと言われるのが嫌なはずもなく、「そうか」とだけ返した。

レーアが生まれたのは春季だという。ウリセスにとって春とは、異動の季節でもあるため、あま

り楽しい思い出はない。これまでの経験上、都合の良い異動というものをしたことがなかった。左遷されたのも、今年の春だ。

「消すぞ」

「はい……」

だが、次の春からは好きになれそうだった。

3 冬を迎えた女

冬朔の朝は、その名に相応しい冷え込みだった。冬の盛りと比べるとまだまだ弱いものだが、秋季を過ぎしてきた人間にとつては、とても寒く感じる。

しかし、レーアはそんな寒さも気にすることなく、夫と自分の外套コートを用意して、いそいそと出かける準備を済ませた。手袋や襟巻えりまきはさすがにまだ大袈裟だろうと、置いていくことにする。

「いつてらっしゃい」

ウリセスと二人で玄関から出るところをジャンナに見送られるのは、これが初めてのことだった。見慣れない、少しくすぐつたい光景だとレーアは思った。

「鍵は閉めてね。知らない人が来ても開けちゃ駄目ですからね」

「分かっているわよもう。義姉さんが買い物行ってる時だつて、ちゃんと守ってるでしょ」

照れ隠しと心配の両方を抱えたレーアは、振り返ってジャンナに声をかけるが、子供扱いされたことに腹を立てた彼女に逆に嘔み付かれる。そんな彼女の声に追い立てられるように、レーアはウリセスと家を出た。

冷えた朝の空気の中、二人で歩き始める。お天気は、いまひとつはつきりしない曇り曇も。晴れそうであり、もつと雲が厚くなりそうでもある、どっちつかずの曖昧な空。

レーアは、そんな微妙な天気を見上げることはしなかった。それよりも、彼女が気にすべきは地面だった。いつもより少しばかり、足元がふわふわしている気がした。

初めて二人で出かけることに、浮かれてしまっているのだ。一緒に家に帰ってきたことさえ、まだ二回しかない。結婚式の後に手を握って帰った時と、豊年祭の後、泣きながら手を引かれて帰った時。

思えば、ウリセスと帰る時は、二度とも手を握ってもらっていた。それを思い出すと、少しレーアは恥ずかしく思う。普通の夫婦というものは、あんな風に外で手を握ることは少ない。勿論、結婚式のしきたりは別だったが。

ちらりと隣を見上げると、彼の身体はレーアより少し前に出かかっていた。脚の長さが違うため、

歩幅に差が出る。更に、足を動かす速度も圧倒的に違う。彼が普通に歩くだけで、レーアは簡単に置いて行かれるだろう。

「あ、あのっ、ウリセス。腕を貸していただけませんか？」

それが寂しくて、レーアは夫にそう告げた。こんなお願いが出来るのは、夫か家族くらいしかない。そしてここには、ウリセスという彼女の夫がいる。いま彼に頼まずして、いつ誰に頼むというのか。

「あ、ああ……」

少しの間が空いた後、彼女の意図に気づいたようで、ウリセスは左肘を彼女の方へと出した。「ありがとうございませす」と、レーアは嬉しさを隠さずにその腕に手をかける。

最初の十数歩は、うまく息と歩幅が合わず、引っ張られそうになったり遅くなりすぎたりした。それが、次第に同じ速度になっていく。そしてついに、最初からそうだったかのように、一緒に歩く姿を二人で作り上げることに成功する。

その何とも言えない小さな充実感に、レーアはいまの自分がとても幸せだと感じた。

冬朔の午前中の神殿は、多くの子供連れでごったがえしていた。これから行われる祭日の礼拝が終わったら、またひとつ年を重ねた子供らにお菓子が配られるからだ。

とはいうものの、連れられている子供は、大体一人。多くて二人。誕生季でない子供は、神殿に行きたがらないせいだ。子供にとつて神官のお説教は、退屈でつまらないものだろう。お菓子というご褒美があるからこそ、誕生季の朔の日は彼らにとつて特別な意味がある。

事実、子供の頃レーアとセヴェーロが東の神殿に出かける時、イレネオは「オレ関係ないもん」と、家でふてくされていたものだ。その代わり、夏には母親の手を強く引つ張って出かけて行つた。子供の甲高い声が響く神殿に、レーアは夫と二人で足を踏み入れる。新たに誰かが入ってくると、余程話に夢中になっていない限り、知り合いかどうかを確認するために、みなちらりと入り口を見るものだ。その視線は、すぐに通り過ぎる予定だった。

だが、神殿の中は一気に静かになった。小さな子供たち以外の、特に大人たちの話し声が一瞬完全に途切れる。静謐な神殿の空気が届いたせいかな——なんて、お花畑なことを考えかけた自分の頭を、彼女は殴りたかった。大人たちは、ぎよつとした顔でウリセスを見ていたし、子供たちの一部もそれに釣られるように固まっていたというのに。

ああ、とレーアは、夫の肘にかけた手を震わせた。

ウリセスについての悪い噂は少しずつ薄れている、と兄弟からは聞いていたが、それでもまだ根強く残っていることを、彼らの表情で思い知ったのである。

一緒に神殿に行きたい。豊年祭で出来なかったことをしたいと思った自分の気持ち、ウリセス

の害になったのではないかと、レーアが後悔しかけた時。

「連隊長閣下！」

神殿の奥から、がっしりした青年が早足で近づいてきた。腕には三歳くらいの男の子を抱えている。

「今日は軍服をお召しではないので、一瞬分かりませんでした。あつ、ええと俺は……」

「エツトレⅡバツン……」

ウリセスが、静かに彼の名を口にする。青年はきよとした後、たまらないほどの笑顔になる。

「名前を覚えていただいて光栄です！ あ、これうちの長男のブレロです。ほら、ブレロ。お父さんに剣を教えてくれる、一番強い人だぞ。お前の夢に出たオバケだって、簡単に倒しちゃうぞ」

その笑顔は明るい声を引き出し、抱えた子供をウリセスへと近づけさせた。子供はよく分かっているように、目の前のウリセスを見上げている。

「良かったら、ブレロをなでただけませんか？ 俺の子供の頃に似て、すごい弱虫で困ってるんですよ」

「よあむしじゃないっ」

舌たらずな言葉とともに、小さな拳がばかりと父の胸を打つ。それに笑う青年。

そんな子供の頭に、ぼんぼんと、大きなウリセスの手が乗る。

「俺も弱虫だった……大丈夫だ。男は最初から強く生まれるんじゃない……強くなりたいと思って生きるかどうかだ」

大人の普通の言葉で、彼はそう子供に語りかける。小さな子に、その意味が伝わることはないだろう。

「あつ、ありがとうございます」

だが、父親には十分伝わったようだ。「良かったな」と、嬉しそうに子供を抱え直している。そんな親子の後ろから、

「あ、あのお……閣下、すみません、良かったらうちの子たちにも……」

両腕に、双子の男の子を一人ずつ抱えた青年が、申し訳なきように顔を出した。

「何だよ、ベナツシ。真似すんなよ」

「真似じゃねえよ、俺だって行こうと思っただのに、お前が先に飛び出すから……っていうか名前言うなよ。俺だって、閣下に名前当ててもらいたかったんだから」

ああ。

レーアは、唇を噛み締めた。泣きそうだったのだ。神殿の中で消えていた音は、いつの間にか戻ってきている。人々は、何事もなかったかのように雑談に戻っていた。

「ベナツシⅡアツカルド、だったな。視察の時は、よく働いてくれた」

人の声の溢れる中、ウリセスが目の前で小突き合う男の一人に、そう語りかける。

「いやあ、光栄です。あの時は土砂崩れに野盗にと、本当に大変でしたね」

レーアの心配など、杞憂だった。ウリセスのことをよく知らないままに嫌っている人がいたとしても、知っている人はこうして彼を慕ってくれるのだ。こんな光景が広がっていけば、だんだん悪い噂も消えていくだろう。

ウリセスが誠実に、まっすぐ部下と向き合っている何よりの証拠だった。

「双子か？」

「はい、自慢の息子たちです！」

「そうか……元気に育てよ」

レーアは夫の穏やかな横顔を見上げ、こみ上げてくる熱い気持ちを吞み下したのだった。

4 冬を歩いた女

冬朔の礼拝は終わったが、まだ誰も帰ろうとはしない。

これから子供たちが神官からお菓子をもらう大事な儀式があり、我慢出来ずに早速席から飛び出

してきている子供の流れを、邪魔してしまうかもしれないからだ。大人はそれを分かっているのに、穏やかに子供たちを見守っている。

レーアもウリセスと長椅子に並んで座ったまま、そんな光景を見ていた。自分で並ぶ子供もいれば、まだ小さくて親に抱っこされて並ぶ子もいる。やっと退屈な礼拝が終わり、子供たちは一番楽しみにしていた時間が待ちきれないという笑みを浮かべている。

先頭の、大きめの子が元氣よく自分の名を名乗る。一人で列に並ぶには、これが出来ることが条件だ。町の戸籍は神殿が管理していて、町民の誕生日や年齢はきちんと記録されている。誰にお菓子を配るかを神殿は把握しており、渡すたびに名簿にしるしをつけていく。

レーアはいつも小さな声で名乗っていたので、神官に聞き直されることもしばしばだった。セヴェーロ口は、更に小さな声だったが。

ウリセスに撫でてもらった子供たちもお菓子の袋を握り、嬉しそうに父親に抱えられて帰っていく。席の横を通り過ぎる時に挨拶されたので、レーアは慌てて「お誕生季おめでとございます」と、小さな声で返した。

自分で歩く子供たちは、お菓子の袋を掲げて踊るような足取りで神殿を飛び出して、その後を親が追って行く。「待ちなさい」「お前のお菓子何？」「同じだよ」「そっちが多い」「ほら前見て歩きなさい」「おんなじだってば」——はしゃぐ声と親の制する声が響く。

その幸せな列が終わった後に、礼拝に参加していた大人たちがゆっくりと帰り始める。ウリセスも、膝の上に載せていた外套を掴んで立ち上がり、隣のレーアに手を差し出した。彼女もまた外套を抱え、夫の手を取って立ちあがる。

一つ前の秋朔しゅうさくには、いまの自分の姿を想像も出来なかったと、レーアは感慨深く思った。結婚というものは、こんなに劇的に日常生活を変えるものなのかと、改めて驚いていた。

神殿を出ると、空の雲はだいぶ薄れていて、明るくなっていた。寒さもそれほどではなく、外套を着込むかどうかレーアが考えていると、ウリセスはさっさとそれを右腕にかけてしまった。もはや袖を通す気はないようだ。

「歩いていけば、温かくなりますね」

レーアも左腕に外套をかけ、空いた右手をウリセスの腕に伸ばす。

「そうだな」

言葉少なに、でもきちんと返事をしてくれる。そんな些細なやりとりでも、レーアは幸せだった。行きと同じ道のを、レーアの歩幅で一緒に歩く。そこにはもはや、朝ほどのぎこちなさはなかった。

「カブを買ったそうだな」

「え？ ジャンナが言ったんですか？」

一昨日、冬朔の日は仕事をすると言われ、言い出しにくくてカブの話は出来ていなかった。昨日は、冬朔とその翌日が休みと聞き、嬉しくてやっぱりカブの話までは至らなかった。

「いや……エルメーテェバラッキを覚えているか？」

「忘れるはずはありません。麦の穂を持ってくださった、ウリセスの補佐官の方ですよ」

レーアは、すぐに反応した。思考速度がそれほど早くない彼女であっても、豊年祭の出来事は、いまなお昨日のことのように思い出される。しかし、その名とカブのつながりは分からない。

「彼の家が料理屋をしていることは？」

「知ってます。母が働いて……あつ、やっと分かりました。一昨日、カブを買った後で母と偶然会ったんです。何で補佐官の方が、カブを買ったことを知ってらっしゃるのかと……」

予想外の組み合わせがうまく結合したのがおかしくて、レーアは小さく笑った。

「知っていたのか」

「ええ、豊年祭の前日に、セヴェーロと一緒にうちを訪ねて来てくださって、紹介された時に分かりました……あ、この話はしていませんでしたっけ」

あの祭りの前日。仕事で遠出をしていたウリセスが戻らず、不安な気持ちの真っ只中にいたところに、あのウリセスの補佐官が訪ねて来てくれた。そのことを今更ながらに思い出して、レーアはあつと思った。ごたごたしていたため、ウリセスにその話をするのをすっかり忘れていたのだ。

「ああ、そういえば来たと言っていたな……何をしに来た？」

しかし、彼に怒っている素振りはなかった。ただ、多少怪訝そうではあったが。

「ウリセスの帰りが、豊年祭当日になるだろうということを伝えに……それと」

ウリセスの腕にかけている手に少し力を込めると、彼がレーアの方へと視線を落とす。彼女もまた、そんな夫を見上げる。

「それと……ウリセスの視察での仕事ぶりが、とても立派だったとおっしゃってくださいました」
どうして、こんな大事なことを伝え忘れていたのかと、レーアは己の記憶力の乏しさに顔を赤らめ、再び視線を落とした。

エルメーテという男は、別にこのことを上官であるウリセスに知って欲しいと思っただけではないだろう。それは、レーアにも分かる。けれど、ウリセスの仕事ぶりを理解し、そして評価してくれる人の話は、彼自身にも聞いて欲しかった。味方はちゃんという。今日、神殿でウリセスを慕う人たちがいたように。

「……」

ウリセスは、すぐには返事をしなかった。視線を前に戻して、そして少し下に落とした後、再びまっすぐ前を向く。

「エルメーテの両親が……『新実の儀』に出なかつたらしくてな。そんな経験のせいかな、祭りに俺

が間に合うようにと色々と心を砕いてくれた……細やかな男だ」

淡々と言葉を紡ぎながら、ウリセスの濃い茶の瞳が、穏やかに細められる。男同士の間にある、レーアには踏み込めない信頼の糸が、彼女の前に浮かび上がってくる気がした。

「新実の儀」——それは結婚一年目の夫婦が、神官の祈りと共に子宝を象徴する一穂の麦を授けられる豊年祭の儀式のことだ。

「そうだったんですか……本当に良い方なのですな」

エルメーテへの羨望を消せないまま、それでも部下を褒める夫が誇らしくもあり、レーアもその緑の目を細める。

その後も、補佐官のおかげで連休が取れたことなどを話しながら、二人は楽しく我が家へと帰りついたのだった。

「……開いている」

レーアは玄関の前でウリセスの腕から手を離し、夫が扉を開けるのを待っていた。

いつもそうしているのか、鍵を差し込む前に、ウリセスは扉の取っ手に手をかけた。それが、何の抵抗もなくすんなりと回ったのだ。

「あらっ？」

つい彼女も、不思議な声を出してしまった。朝、あれほどちゃんと戸締りをするように、ジャンナに言ったというのに。

一瞬だけ、二人は視線を合わせる。ウリセスの目は、いつもとは違う険しい色を浮かべていた。彼はそのまま顔を前に戻して扉を開け、何も言わずに家の中へと踏み込んだ。静かなアロ家の玄関先に、人の気配はない。

「ジャンナ！」

ウリセスが視線を巡らせて、よく通る大きな声で静かな空気を引き裂いた。

刹那。

ガチャンだのバタンだの、複数の大きな音が入り乱れた。そして、バタバタと大きな足音がひとつ二人の方へ、近づいて来る。それは、とてもジャンナのものとは思えなかった。

音に弾かれるようにウリセスは、ついてきたレーアを後ろ手に自分の陰へと押し込んだ。そのためレーアの視界は半分以上、彼の大きな背中であらわれた。

「義兄上！ お、お邪魔してます！」

台所につながる廊下から飛び出してきたのは——セヴェーロだった。レーアの目の前にあるウリセスの身体が、一瞬完全に動きを止める。

「俺もいまーす！」

姿は見えないものの、奥からイレネオの声も聞こえてきた。ついで、鍋のふたらしきものが落ちて地面で円を描く音。ウリセスの肩の力が明らかに抜ける。

「知ってる人だったから、開けてよかったでしょー!?」

やはり姿が見えないままのジャンナが張り上げた声も、玄関まで届く。最後には深い吐息と共に、ウリセスはレーアの前からどいた。やっと開ける彼女の視界。

二人を驚かせたアロ家とコンテ家の弟妹たちの様子に、レーアはどう反応したらいいのか分からないまま、まばたきを三度繰り返したのだった。

5 冬を迎えた男

「ふ、冬は義兄上の誕生季だと聞いて！」

「カブは姉さんが買ったっていうから。昨日買った白菜を差し入れに来たのがセヴェーロ。俺は塩漬け肉。塩漬け肉に季節はありません、万能です！」

コンテ家の弟二人が、薄く開いた台所の扉の前で互いをちらちら見ながら、口早に訪問の理由を告げる。主が不在の間に勝手に中に入ったことを、咎められるとも思っているかのように。

ウリセスの誕生季の話は、すっかりコンテ家に広まっているようだ。まさかこの年になって誕生季に贈り物をもらうとは、ウリセスも思ってもみなかった。

「ああ、わざわざすまない」

そして、二人に対して怒っているわけではないことを、静かな声で示す。

「せっかく来てくれたのを、もらうものだけもらって追い返すなんて失礼でしょ？ どうせすぐ兄さんたちも帰ってくるから、このまま昼ごはんでも食べていけばって言ったのよ」

肝心のジャンナは、台所の中から声だけを投げる。昼食の準備をしているらしい匂いがしてくるので、おそらく鍋の前にいるのだろう。レーアの指導のおかげで、ここに来たばかりの頃には家事のひとつも出来なかったジャンナも、スーپرくらいなら一人で作れるようになっていた。

「それは分かったけど、どうして二人とも台所にいたの？」

夫の隣から、レーアは弟たちに問いかける。その答えを待つ間に、彼女が手を差し出してきたので、ウリセスは持ったままだった外套を預ける。さっきまで心配していたレーアも、実の弟たちの登場にすっかり安心したようだ。こうして自分の世話を自然に出来る様子から、それははつきりとウリセスにも見て取れた。

「いやその……ジャンナが一人で昼メシ作るっていうんで、ちょっと心配だなーと思っていたら……『上手になったんだから、見せてあげるわ。来なさいよ』って怒られて」

イレネオが、ジャンナの強引な言葉を思い出したのか、はははと笑いながら白状する。

「すみません、勝手に台所にまで入ってしまった……」

セヴェーロは、家の主であるウリセスを一度見てから、台所の主であるレーアを見た。

「何よ、それ！ 何で私が悪者みたいになっただの!？」

半端に開いていた台所の扉がバタンと音を立て、ジャンナのつり気味の茶色い目が飛び出してくる。

「ああ、ジャンナ……火は大丈夫？」

ハラハラとした心地のレーアが、二人分の外套を持ったまま前に出て来た。かまどの火の前から彼女が迂闊に離れたのではないかと心配したに違いない。焦げるものや吹きこぼれるものがあつたら大変だ。

「大丈夫だつてば。もう、誰も私を信用しないんだから。せっかく、二人が帰ってきたら昼食を食べられるようにって頑張ってたのに」

ひどくむくれるジャンナ。右目の下のほくろが、ぴくぴくと痙攣している。レーアがいなかったので、今日は一人で昼食を作り上げようと決意していたに違いない。ウリセスとて、そんなジャンナのやる気に、水を差すつもりはなかった。

「分かった……昼メシの用意はジャンナに任せて着替えてくる。出来たら呼べ」

ウリセスはもう一歩前に出ようとすると、ウリアの腕を捕まえて、引き戻した。彼らが騒げば騒ぐほど、ジャンナが火の前に戻るのが遅れるだけだ。さっさとジャンナの心を冷静に、そして身体をかまどの前に戻すことが最良の方策だった。

「最初からそうすればいいのよ。まったく」

唇を尖らせたジャンナは、二人を追い払うように手を振って台所の中へと戻っていく。それでようやく、レーアがふうと安堵のため息を吐き出した。しかし、またすぐ心配そうに台所を覗こうと首を伸ばし始める。

「イレネオ、セヴェーロ。訪ねてきてくれたのに構わずにすまん……もう少しジャンナの相手をしてくれるか？」

中のジャンナに聞かれないようにぼそりと、ウリセスは二人の騎士に妹を託した。彼ら二人がいれば、もし何か起こっても最悪の事態にはならないだろうと思っただのだ。

「ま、任せてください」

頼まれたことが嬉しいのか、目を輝かせるセヴェーロ。

「りょーかいですっ」

少し気の抜けた敬礼を返すイレネオ。そんな義弟たちに台所の安全を任せ、ウリセスはレーアを引っ張っていく。

「すみません、弟たちがいきなり。多分、ウリセスの誕生季を、予告なしにお祝いして、驚かせようと考えたんだと思います」

何度か後方を振り返っていたレーアだったが、ようやく台所を心配する気持ちが静まったのだろう。階段を上る頃には顔をちゃんと前に戻した。しかしその表情は、やんちゃな弟たちに少し困らされた姉のものだった。あの子たちだったら、と小さく呟く。

「いや、心強い……うちのことを気にかけてくれる人間がいてくれて、助かっている」

セヴェーロには、豊年祭の時に留守中のレーアを見てもらうように頼んでいたこともある。そしていま、彼らは当たり前のように、ジャンナを心配してくれている。まるで、本当の妹のように。「ありがとうございます。でも、一応後で釘を刺しておきますね」

階段の上りで少し呼吸を乱すレーアがそう言った時、ウリセスは何の話か一瞬分からなかった。「今日は二人だから良かったんですけど、一人で訪ねて来てジャンナしかいなかったら、玄関から奥には入らないように……ジャンナは嫁入り前で、一応うちの弟たちも年頃ですから」

階段の一番上で、想像だにしていなかったことを言われて、ウリセスは言葉に詰まってしまった。確かに、年齢的に考えるならば、そういう方向に発展する可能性もあるだろう。突然、イレネオやセヴェーロまでをも警戒しなければならぬという慣れない状況に、ウリセスはつい苦い表情を浮かべてしまった。

「ああでも、一言言っとかないといけないのは、ルーベン兄さんですね。ジャンナが一人で家にも、多分平気で上がり込むと思います」

更に、コンテ家一番の問題児が挙げられ、ウリセスは無意識にこめかみを押さえていた。年頃の娘がいるというのは、こんなにも周囲に気を遣わなければならないものなのか、と。

「うん、おいしいよ、ジャンナ」

「ほがほが」

冬朔の昼食は、五人で食卓を囲むにぎやかなものだった。ウリセス、レーア、ジャンナが並び、向かいがイレネオとセヴェーロ。

まだ具の形は安定していないが、それでも普通の家庭料理として十分食べられる野菜のスープと、塩漬け肉を挟んだパン。前者を味わって、ジャンナに笑顔で感想を告げているのがセヴェーロ。後者にかぶりついて、親指を立てているのがイレネオだ。後者の場合は、肉が食べられればそれでいいのかもしれないが。

「でしよでしょ、スープはまだお代わりあるから食べてってよね」

味はまあまあだったが、作る分量を間違えたらしく、まだ鍋にはたっぷりのスープが残っている。お客が増えた分、いつもより多めに作ろうとしたがための失敗なのだから、情状酌量の余地はある。

まだまだ応用は利かないようだ。

「少し身体が出来てきたな」

いつも会っているわけではないからこそ、分かることもある。ウリセスの目には、セヴェーロの身体に前よりもいくらか筋肉がついているように映った。隣のイレネオにはまったく及んでいないが、彼なりに気をつけているのだろう。

「分かりますか？ ちょっとですが体重増えたんです」

ぱっと顔を輝かせて、セヴェーロが自分の腕を持ち上げて見せる。ウリセスが気づいたことが嬉しかったのか、続けてイレネオに笑顔で視線を向けるが、隣はまだ塩漬け肉のパンを平らげるのが集中していて、それに気づいてもいない。

「じゃあ、もっと食べなきゃ。早くスープ皿、空にしてよ」

「う、うん」

逆にジャンナに急かされて、セヴェーロが戸惑いながらもスープにスプーンを落とす。量を食べるのには、まだまだ彼も苦労しているようだ。

そんなセヴェーロの悩みなど、まったく気にもしていないジャンナが、「あ」と思い出したように向かいのコンテ家の兄弟を見る。

「ねえねえ、この町でオススメの店ってどこ？ 明日、やっと買い物に行けるのよ。ウリセス兄さ

んの監視つきだけけど」

この言葉の最後でジャンナはべろつと舌を出し、ウリセスをちらと見る。皮肉のこもった言葉であることは分かっていたが、ウリセスはそれを無視した。どうしてそういう言い方しか出来ないのかと思うことは、止められなかったが。

「食堂？ 肉屋？」

「服屋よ。もう、イレネオさんには最初から聞いてないわ」

「ひどいな。一応古着屋なら、友達の家だから知ってるんだぞ」

ジャンナとイレネオが顔を見合わせて、軽口を叩き合う。ウリセスには敬語を使う彼も、ジャンナの前ではただの悪戯小僧だ。軽やかな、しかし下心を感じさせないしゃべり方が、イレネオの年齢を下げて見せた。

「服屋って言えば、姉さんの友達がお嫁に行つたところがあったよね」

そんな小うるさい二人の間を横切つて、セヴェーロが姉に話を振る。こういう話は、イレネオよりセヴェーロの方が得意のようだ。控えめだが、場の空気を崩さない話の広げ方。

「ええ、エリデの嫁ぎ先がそうだから、明日はジャンナの服を見に、そこに行こうと思っているのよ。冬が来たから、外套も売っていると思うの」

基本的な服屋は、寸法を測り、仮縫いをしてお客の体型に合わせて服を作る。馴染みの店であれ

ば型紙を保存してあるので、同じサイズで注文しておくことも出来る。しかしレーアの友人の店は、冬になってから仕立てていては間に合わない季節物の服や、普段からよく着られるシャツなどを、一般的なサイズを作り置いて売っているという。

「エリデさんってさ……」

セヴェーロが、一瞬だけウリセスの方を見る。見知らぬ女性の名を口にされながら、どうして自分を見る必要があるのか。何かを含んだ言葉に、ウリセスは耳を傾けた。

「あっ、そうね……ウリセス、エリデってね」

しかし、それにはレーアがすぐに反応した。

その女性は——エルメーテⅡバラッキの、ひとつ下の妹だという。名前だけとは言え、休みだというのに連隊長補佐官は人の家の食卓にまで現れるのか。働き者だなど、ウリセスは心の中で小さな皮肉を呟いた。

「世間は狭いな」

レーアと同じ年で、友達だと聞いて納得すると同時に、世間というよりこの町がさして広くないことを感じた瞬間でもあった。

「なにになに？ エルメーテって誰？」

この中でただ一人ウリセスの補佐官を知らないジャンナが、話題に食いつく。この質問に、彼女

以外の全員が、ウリセスの顔を見た。確かに、ここでエルメーテが何者かを説明するのは彼が適任だろう。

別に誰が答えても結果は変わらないのだろうが、視線を受けているのにだんまりを通すのはおかしい話だ。どうせ説明を聞いても、ジャンナがつまらない顔をするだろうことはウリセスにも分かっていた。それでも半ば義務的に「俺の補佐官だ」と言葉にする。そしてジャンナは、「なーんだ」とやっぱりつまらない顔をしたのだった。

夕食時にはコンテ家の二人も家に帰り、いつもの三人での食卓となる。

「はい、ウリセス。ウリセスの皿には、カブを多めに入れておきました」

湯気のある温かなシチューが、レーアの手によってウリセスの前に出される。皿の中には、たっぶりのカブ。

それを見て、彼は都の母を思い出していた。女性というものは、愛情を具の量であらわそうとするのだろうか。

「カブはお嫌いでしたか？」

彼がシチューを眺めたまま動かなかったせいかわ、レーアが心なしか不安そうな声を出した。

「いや……うまそうだな」

ウリセスの答えに、レーアが嬉しそうに「よかった」と笑う。

ああ。

彼はその笑顔を見て、少し後悔していた。目の前のレーアに、ではない。都にいる母に、だ。

本当はそんなにカブが好きではなくても——「うまかった」の一言くらい、言ってやればよかった、と。

6 女二人と出かけた男

「久しぶり、レーア。来てくれて嬉しいわ」

「久しぶりね、エリデ。少しやせた？」

仕立屋に入ると、若い店主とその妻が出迎えてくれた。妻の方はレーアを見るなり、顔を輝かせた。

「それでもないわよ……あ、こちらが？」

彼女の丸い額の上を、くるくるとくせのある茶色い前髪が飾っている。なるほどエルメーテの妹だと、ウリセスはその髪のクセで理解した。エルメーテも伸ばすと、こんな風になるのだろう。彼

があれほど髪を短くしている理由が、強いクセ毛のせいなのかどうかは分からなかったが。

「ええ、夫のウリセスよ。それと、夫の妹のジャンナ。今日はジャンナの冬服を見繕みつくろいに……」

紹介され、ウリセスは軽く会釈した。ジャンナはもはやレーアの紹介など聞いておらず、きよろきよろと店内を窺うかがっている。

「あ、うちの兄がいつもお世話になっています」

ウリセスの視線を受けたせいで、少しばかりためらいが見られたが、それでもエリデと呼ばれた女性は彼に微笑みかけた。

料理屋の娘だ。きつと家でも給仕などの手伝いをしてきただろう。強面こわもての相手でも接客をしなればならないという環境が、彼女の心臓を丈夫に育てたのかもしれない。エルメーテも、最初からこんな風に柔和に対応していた。さすがは兄妹だと、ウリセスは感心する。

「出来合いのものを、見せてもらっていいかしら？」

「どうぞどうぞ」

ジャンナが待ちきれない様子で足を踏み出したので、エリデは彼女を連れて婦人服の方へ案内する。必然的に、ウリセスとレーアが残ることとなった。ああでもないこうでもない、ジャンナが欲しい服の希望を口に出しているのを、ウリセスの妻は目で追っている。

「レーアは」

「はい？」

ふと思ったことを口に乗せかけると、予想外に早く答えが返ってきて、ウリセスは言葉を切られた。

「レーアは……服はいらぬのか？」

改めて、最初から言い直す。

「いまのところは。結婚の時に、両親がたくさん作ってくれたので十分です」

彼女の答えは、素直なものだった。ウリセスがレーアの両親に多めに渡した結婚の支度金は、嫁ぐ娘が不自由をしないようにと、しっかりと彼女のために使われていた。彼はそこにコンテ家の親心を見た。

女性にとって何が必要か、ウリセスに分かるはずがない。レーアの顔に遠慮している様子はないので、大丈夫だろうと彼は思った。

「ちよつとレーア義姉さん、こつちきてー」

自分が主役の買い物で放っておかれるのが嫌なのか、ジャンナが呼んでいる。ちよつと行ってきます、とレーアは離れていった。そこから、服を囲んで女性たちの華やか、というか騒がしい時間が始まる。自分が参加する必要がないだけマシかと、ウリセスはふうと息を吐いて、店を軽く眺め回した。

古くからある店なのだろう。柱も床も年季を感じさせながら、よく手入れをされているようで艶が出ています。毛を含んだ生地の特約の匂いが、ウリセスの敏感な嗅覚をつつく。店に入って右側が男性用、左側が女性用となっていて、どちらも奥に大きなカーテンで仕切られた小部屋がある。採寸や試着をするところだろう。

やや右側に足を踏み出し、紳士用の出来合いのものを軽く見る。シャツ、外套、帽子、タイ。これからの季節に必要な、マフラーや手袋も既に置いてある。ベルトなど革製品は見当たらない。革用の店が別にあるのだろう。

店主は、こちらを気にしながらも、声をかけづらいのか、奥の机の上に広げた生地と睨めつこをしているふりだ。

女側の騒々しさと男側の静かさで、綺麗に左右に割れた店内。そんな店の真ん中の扉が、ガチャリと開く。

「こんにちは、帽子入った？」

その声に、反射的にウリセスは振り返っていた。あまりに聞き慣れた声だったのだ。

「ああ、連隊長閣下。ここにいらつしやっただね。毎度あり、です」

扉のところには、エルメーテ「バラッキ」。

短い髪を深い緑と茶の鳥打帽で隠し、大きなひし形が連続した柄のウールのベストをシャツの上

に着て、革の上着を手をぶら下げている。どこの伊達男が来たかと思いきや、自分の補佐官でしたというオチだ。ウリセスは、思わずそんなエルメーテを二度、しっかりと見てしまった。

「ああ、エル兄さん。帽子入ってるわよ……あなた、お願いします」

レーアもまた、バラッキ家の兄妹が会話を交わしている姿を二、三度確認している。やはり彼女の目から見ても、エルメーテは私服姿だと大分印象が違うのだろう。とても軍人には見えなかった。

「奥様と妹さんの服選びですか？」

「妹のだ。こっちにいきなり来たからな。服が足りないらしい」

店主が奥に品を取りに行ったため、エルメーテはウリセスの方を振り返って帽子を取った。そうすると、首からは間違いないいつものエルメーテに見える。レーアも落ち着いたのか、外套選びに夢中のジャンナへと視線を戻していた。

「え……奥様にも何か買うべきじゃないですか？」

ウリセスの言葉を聞いた直後の、エルメーテの顔ときたら。心の中で「この唐変木」くらいは余裕で思っただけのものだった。しかし、彼はさっとその表情を消し、「ちよつと待っていてください」と、左側の婦人用の領域にどんでん入って行ってしまふ。

啞然としたままウリセスがエルメーテを目で追うと、彼は女性ものの小物を漁り始めた。その間にも、ちらちらとレーアを見ている。彼女が振り返らないのいいことに、売り物のスカートな

どを軽く持ち上げて、レーアと商品の色を見比べたりするのだ。またもウリセスには理解できない、エルメーテの気配りが発動したようである。

一応、欲しいかどうかは聞いたんだがなと、ウリセスは心の中で言い訳のひとつもしてみた。男の甲斐性なるものを、ウリセスなりに多少は考えているのだ、これでも。しかし、必要ないと言われて、彼はあっさり引き下がってしまった。

エルメーテの態度からすると、妻の意思など関係ないかのようだ。だからと言って、男が婦人服売り場に入っていくのはどうかとウリセスは思っていた。女性本人に選ばせるか、もしくは店主などに見繕ってもらうのが普通だろう。

そんなエルメーテの視線が、ふとジャンナに着せ掛けられる外套に向けられた。そして彼は考え込むように表情を止めた。

「エリデ、もう少し袖を出してやれよ、裾も。まだしつけ中の、吊るし売り用の外套があるだろう？ あれで調整してやれば、そう大した労力でもないだろ？」

そして、彼はあろうことか、ジャンナの選んでいる服にくちばしを突っ込んだ。さすがのウリセスも、これには呆れた。女性の服装に男が意見をさしはさむなんて、よほど問題がない限り彼の常識ではありえなかった。

「やっぱりそう思う？ 袖にもうちよつと余裕欲しいわよね、これ……ああもういやになっちゃう。

背なんてもつと低くてよかったのに」

その声の主が誰かも振り返って確認しないまま返事をしたジャンナは、仮に着ている外套の袖口を見つめながら顔を擧^かめる。服選びに夢中なのだろう。

「どうして？ すらつとして長い手足だから……人を選ぶ大きな柄の服や華やかなドレスなんかがよく映^はえると思うよ」

エルメーテは、とても不思議そうな声を出し、ジャンナが劣等感を抱いている部分をさらりと褒めた。

「え、そう？ ……つて、あなた誰？」

一瞬驚いた声を出して、それから我に返ったジャンナが、言葉の主^に視線を上げる。

「初めまして、僕はエルメーテIIバラッキ。君の兄上の部下で、そのエリデの兄。怪しい者じゃないから、安心して」

持っていた帽子を自分の胸に当てて、エルメーテがにこやかに自己紹介する。その姿は、若くおしゃれな好青年にしか見えない。ウリセスは、ついうろんな目で自分の補佐官を見た。

「……」

この感覚を、何と言ったらいいのか、ウリセスには分からなかった。嫌な予感、というのが一番近いのだろうか。レーアの弟たちの時には感じなかったものを、いま間違いない彼はエルメーテに

立ち読みサンプル
はここまで

覚えようとしていた。

「あ、そう。あなたが噂のエルメーテさんね」

そこで、ジャンナもまた余計なことを言うものだから、

「へえ、僕の噂……アロ家の噂に上るなんて、僕も出世したな」

話がふくらんでしまったではないか。

「ええと……秋季にはわざわざ麦をお届けいただき……」

更に、レーアが思い出したように、その話を蒸し返してしまい、

「え、なになに？ 麦ってなに？」

ジャンナが食いつき、また話がふくらんでしまうのだった。

「……エルメーテ」

なにをしてるんだ。

彼の家族と和やかに談笑する自分の部下を、ウリセスは低い声で呼び戻さなければならなかった。

